

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 平田 秀

平田秀氏の論文「三重県尾鷲市尾鷲方言のアクセント研究」は、三重県尾鷲市尾鷲の方言に見られるアクセントを記述し、それを体系として再構成し提示したものである。旧紀伊国のうち和歌山県側の大部分においては、京阪アクセントと系統を同じくするアクセント体系が見られるが、三重県南部の尾鷲市、熊野市および北牟婁郡、南牟婁郡においては、和歌山県とも三重県北中部とも異なるアクセントが存在することが夙に知られていた。しかし金田一春彦(1959)が短い語の調査を行って以来、同地方のアクセントの現地調査はほとんどなされていない。本論文はそのうちの尾鷲市尾鷲において、平田氏が 2010 年から十次にわたって現地で調査を重ね、複合動詞を含む動詞、助動詞、複合名詞や外来語を含む名詞、形容詞、助詞、さらに文節にまたがる連続変調などアクセントの諸現象を包括的に提示し、かつその体系の発生過程を論じたものである。

平田氏は第 2 章において調査方法を説明した後、第 3 章において日本語方言のアクセント諸体系を類型別に概説する。ついで第 4 章において、尾鷲方言が多くの日本語方言に見られるアクセント核を持つことに加え、声調的要素である式を 3 種類も持つという特異な事実を提示する。このうち β 式と呼ばれる早上がり声調は先行研究では知られていない。また文節の組み合わせによってアクセントが変わる連続変調も記述しており、ともに方言類型上珍しい現象である。3 種類の式の存在については、第 5 章において音響音声学的に証明を試み、さらに第 6 章において尾鷲方言のアクセント体系が、近世初期に想定される京阪アクセントと対応関係にあることを方言間比較によって論じている。第 7 章、8 章、9 章は名詞アクセントを詳説し、第 10 章、11 章、12 章は動詞とその活用のアクセントを記述し、第 13 章で形容詞、第 14 章で助詞のアクセントを記述しているが、いずれの品詞類においても面接調査による豊富な一次資料と鋭敏な観察力によって、尾鷲方言が他の近畿諸方言に見られない複雑なアクセント交替と多様な実現形を持つことを示している。

平田氏の研究は、まず専ら共時的記述によってアクセントの言語事実を体系として提示した後、他方言との比較によって通時的変化を探るという、帰納的な手法によるものであり、それによって得られた通時的変化の説明には、事実裏打ちされた説得力が見られる。この手法は例えば、共時的観察から β 式という声調を設定したのち、助詞つきの実現形をもとに β 式が α 式からの音変化によって生じたことを示した第 14 章の分析に発揮されている。本論文には事実提示を重視するあまり事実のもつ意味やその背後の原理の考察が十分でない箇所があるなど、改善の余地はあるものの、日本語方言アクセント、および音韻論の分野で貴重な成果をもたらす研究である。以上の理由から、博士(文学)の学位に値すると判断する。